

アイヌ民族文化研究センターだより

NO.10

1999年3月31日
発行

『久保寺逸彦文庫図書資料目録』 の刊行について

昨年度に当センターが寄贈を受けた久保寺逸彦文庫については、その概要や整理作業の状況をこの『センターだより』誌上でもご報告してまいりましたが、このたび、その中から、まず図書資料の目録を刊行いたします。

これは、久保寺逸彦文庫の中から図書資料として分類・整理した単行本と雑誌合せて約2,800点についての目録です。単行本はおおまかな内容ごとの分類に、雑誌は誌名の順に、それぞれ配列しております。個々の資料ごとに、書名や編著者名、発行書名などの書誌事項や、資料の状態の特徴などの情報を記載しました。このほか書名索引を付記するとともに、参考資料として久保寺逸彦氏の主要著作目録と略年譜を掲載しています。



整理中の図書資料

『バラートシ・バログ・ベネデクコレクション調査報告書』の刊行について

当センターは去る1997（平成9）年に、ハンガリー国立民族学博物館から、同国の民族学者バラートシ・バログ・ベネデク（1870～1945）の収集したアイヌ関係資料を借り受け、その展示を開催いたしました。借り受けた資料についてはこの時記録をとり、その後も資料の調査研究を行ってまいりましたが、このたび、その成果を調査報告書として刊行する運びとなりました。

この報告書では、バラートシ・バログ・ベネデクの収集したアイヌ関係資料のうちハンガリー国立民族学博物館が所蔵するものについて収録しました。アイヌの民具等の資料については、今後特に、資料の材質や来歴などを明らかにしていくことが、民具の作成技術や地域差を学び伝承するためにも重要ななると思われます。そこで、この報告書でも、一般的の図録と同様に資料のリストと写真を掲載したほか、過半の資料には解説を付け、またバラートシ・バログの手稿など、これらの資料に関する文献資料も掲載しています。



バラートシ・バログ

千里の道を四歩半

奥田 統己

1994年の6月、当センターの開設とともに非常勤職員として勤務するようになってはやくも4年と10箇月が経過する。そしてこのたび本務の大学の職務の都合をもって、勝手ながらこちらの職を退くことになった。この間、センター内外を問わず多くの人々に教えられ、さまざまなことがらを学んだ。約5年間という期間の長さもさることながら、ここで過ごした時間が密度の濃いものだったことを改めて思う。皆さまにお礼申し上げる。

* * *

非常勤研究職員の責務として意識し続けたのは、常勤の若手研究職員の育成である。そのために私がしようとしたことの第一は、自分自身が貪欲に仕事をしながら、その過程をできるだけ彼らに提示することだった。

その核としたのは、長期的な目標に基づいた1年間の仕事の計画を毎年度始めに立てて年度途中と年度の終わりにそれを検証し、それらを他の職員の前で報告することである。計画が実現したものもしなかったものも、原因や対策を含めて報告するようにした。また着想から資料の収集、着想の検証、そして成果の公表まで、可能な限りそれぞれの段階で報告した。とくに前年度の計画達成状況と今年度の計画との接続を明示することを重視した。

同じようななかたちでの報告は他の職員にも求めた。そしてふだんから、自分がわからないでいること、以前わからなくて最近わかったことについてできるだけ課内で意見交換をするよう心がけた。

このことの成果は大きかったと思う。資料の収集・調査、その整理・保管、それに基づく研究、そしてその成果の公開・普及という研究職員の職務は、一貫した長期的な視点に立って進めることが重要である。そのことは浸透しただろう。また私自身も、報告の場でも日常的にも、他の職員から多くを得る

ことができた。

そのほか、アイヌ語学の基礎を当初は毎週一回、だんだんそれぞれの仕事が増えてくると集中講義方式で年間に数十時間講義した。また時間外の自由参加の勉強会としてアイヌ語の聞き取りの授業も毎週行なった。

少なくとも私自身にとって、これらの授業は大きな意味を持ち続けた。どんなに忙しいときでも「生徒」がいる以上、週に1回確実にアイヌ語の精密な聞き取りをしなければならない状況が作り出された。アイヌ語の力の向上を自分自身感じとれたり、現実にいくつかの着想をこれらの授業のなかから得ることができた。参加した職員もそこから何らかのアイディアをつかんだとすれば、教える側として喜ばしいことである。

しかし教育プログラムとしてみれば、これらはやや中途半端な結果に終わった。さまざまな業務が軌道に乗り仕事の量が増大するなかで、とくに時間外の勉強会の出席者は減っていった。もちろん教える私の力量不足が大きな原因である。しかし、時間外の自由参加でよいのかと問題提起する事を含め、継続が実力の上下に直結する種類の訓練の重要さをもっと強調する事が私の責務だったかもしれない。

* * *

以上振り返ってやはり思うのは、長期的な目標に向けて少しずつあれ継続的に進むことの重要性である。だからこそ私自身密度の濃い時間を過ごせたのだと思う。最後にあえてこのことを強調しておく。

今後、一時の行き詰まりなどから個々の職員がそれぞれの長期的な目標を見失いかけることがあるかもしれない。それが日常の業務が忙しいからといって許されることのないような体制作りを、さらに進める必要がある。また外見は華やかだが準備期間の短い企画で職員の時間がとられるような「一将功なりて万骨枯る」要素があつてはならない。長い目で部下を育てることのできる将軍も求められるだろう。

ハンノキ

北海道の樹木の中で、俗にハンノキと呼ばれる種類の木があります。全国各地に分布するハンノキは「ぶな目かばのき科ハンノキ属」という分類の中にはあります。一般的には、釧路湿原に広がるハンノキ林を思い浮かべると良いかもしません。

アイヌのハンノキの利用法について調べると、丸い棒にして赤ちゃんのおしゃぶりとしたり、この木の幹は灰褐色ですが、内皮は赤味をおびていて、染料として使われたりもします。また、筆者の聞き取り調査でも「その内皮を乾かした後にお湯で煮立てて煎じる。その煎汁は赤く、月経などで大量の出血をした場合に飲む。」といった補血剤としての例を聞いたことがあります。

また、文献でも『知里真志保著作集 別巻I 分類アイヌ語辞典 植物篇』(以後『植物篇』)の記載を例に取ると、上記のような使用例の他に北海道東部ではこの木のイナウ(木幣)が作られ、家の神や魔除け、沖の神などのために使われたとあります。

『植物篇』には、「国土を作った神が、国土を作った時、ハンノキの炉ぶちを作って、踏むと、下座の方に頭を持ち上げ、上座の方に頭を持ち上げる。腹を立てて、海の上に投げたら、etaspe(トド)になつて、ずうっと行ってしまった。その時から、etaspe頭を持ち上げる者という名を持つ者が海の中に居て、その肉もハンノキの様に赤い。」とハンノキと沖の神と関係について説明されています。

* * *

ところがこのハンノキは、『原色牧野植物大図鑑 離弁花・単子葉植物編』1997牧野富太郎(以後『牧野図鑑』)によると、北海道の在来種としては、主にハンノキ(別称:ヤチハンなど)、ヤマハンノキ(ヤマハンなど)、ミヤマハンノキの3種類がありますが、アイヌ文化の植物利用では、ハンノキの分類は難しいという問題に直面しました。

これまで述べた使用例は、どれをとっても文献中ではハンノキという樹種名のみでの紹介が多く見られます。先の『植物篇』の例は「ミヤマハンノキ」という項に書かれており、その他の2種類のハンノキも別項に記されています。しかし、他の文献では、ハンノキを分類していないことが多く見受けられるのです。

ここであげた3種類のハンノキは、『牧野図鑑』によると、ハンノキが「林野の湿地を好んで生え、田の畦などに栽植される落葉高木」、ヤマハンノキは「山野に生え、また砂防林として栽植する落葉高木」、ミヤマハンノキは「亜高山帯から高山帯に生える落葉低木か小高木」とそれぞれ分けて説明されています。

しかし、これに対し調査での聞き取り例をあげると、ハンノキとヤマハンノキが多く繁殖する地域のであっても、「高いところに生えるのがヤマハンで、湿ったところのがヤチハン」「しっかり木肌を見て分ける」「ハンノキはハンノキだ」といったような、分類の必要性に疑問が出るような話を聞くことがあります。

* * *

ですから、①そもそもハンノキはどのような使われ方をしていたか、②地域によって何種類のハンノキが繁殖していたか等の調査を行うことで、アイヌのハンノキに対する考え方を知るきっかけとし、また、アイヌの植物利用においてハンノキのような例がどのくらいあるのかを調べ、これらの分類の有無から、現在の一般的な植物の和名とアイヌ語名の対比の可能性を調査することが必要だと思います。

(貝澤 太一)



問い合わせあれこれ(1)

当センターが1994年6月に開設されて以来、アイヌ文化に関する様々な問い合わせが寄せられています。これまで受けた800件を越える質問の中には、同じような内容のものがいくつもあったり、問い合わせに答えるために担当者が調べたことで職員自身が学ぶことができた事柄も少なくありません。これらの中から、よく寄せられる問い合わせや興味深いものをこの広報誌に取り上げて紹介していくことにしました。

* * *

問い合わせに対しては、担当者が当センターで調べられる範囲で答えたり、その答を得るための方法として、参考になる文献名や資料の所蔵機関などを伝えたりします。また、調べられている目的などを伺うことで、より適切なアドバイスができる場合もあります。今まで寄せられた問い合わせの9割以上は電話によるもので、「すぐに答を知りたい」と要望されることも多いのですが、質問内容によっては即座に答えられない難しい点もあります。例えば、アイヌ語地名の意味を尋ねられた場合には、その由来がいくつもありえると説明しなければならないことがあります。また、「○○○をアイヌ語で何と言いますか」というような質問では、現代の生活文化にあるものの考え方や道具などの名称がアイヌの伝統的な生活になかった場合、アイヌ語としてもそれを言い表すことばが見当たらないことがあります。それとは逆にアイヌ語にある単語が日本語にはないこともあります。今回はそうした中からアイヌ語についての一例を紹介します。

Q. コノハズクとアオバズクという鳥はアイヌ語で何と言いますか？

A. いろいろなアイヌ語の言い方があることを最初に伝えると、問い合わせをしてきた人は千歳市での言

い方を知りたいと言われました。そこで『アイヌ語千歳方言辞典』(中川裕・草風館・1995)記載の、コノハズクはトキット tokitto、アオバズクはホチコクhocikokという呼び名を伝えました。この鳥の名称を知ろうとした目的は「復元したアイヌの衣服にシマフクロウ以外のフクロウの名前を付けてみたい」ということでしたが、別のことばに置き換えるときは文化の違いも考慮しなくてはなりません。

フクロウの仲間は何種類もいますが、その中でアイヌが良い神として扱っていたのは、コタンコロカムイ（村を持つ神）やカムイチカプ（神の鳥）と呼ぶシマフクロウとイソサンケカムイ（獲物を下ろす神）などと呼ぶエゾフクロウです。これらのフクロウは村を守ったり、熊の居場所を人間に伝えたりするありがたい神様という記録があります。一方、フクロウ科で小さな部類のコノハズクやアオバズクについては、あまり良い由来を持たない伝承が残されています。コノハズクは「山に置き忘れられた赤ちゃんの魂が鳥の姿に変えられたもの」という哀れな出自があったり、アオバズクについては「化け物」などと呼び恐れられた記録もあります。

問い合わせをしてきた人は、シマフクロウが立派な神様なのだから、他のフクロウの仲間も良い神様に違いないという気がしていたそうです。しかし、かつてのアイヌの考え方を知ることで、自分の作品名にすることは検討しなおすということになりました。

(大谷 洋一)

*これを回答するにあたって、以下の文献を参考にした。

- ・知里真志保『知里真志保著作集別巻I』平凡社 1976
- ・萱野茂『炎の馬—アイヌ民話集』すずさわ書店 1977
- ・北海道教育庁生涯学習課編『アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査)』IX、X北海道教育委員会 1990、1991
- ・中川裕『アイヌ語をフィールドワークする』大修館書店 1995

歌い語りについて

アイヌ語による物語や祈りなど、わりに長い内容をもつもののうち、それを旋律にのせて歌い語るタイプのものがある。

アイヌ語がよくわからないまま、まず音の流れや動きや音色などの全体を、いわば音楽として何種類何曲か聴くうちに、それぞれに何となく区切りというかメロディのひとまとまりがあって、それが繰り返していく感じのあることに気がついた。

その後、少しずつアイヌ語を勉強し、単語を聞き取ったり辞書で調べたりして、歌詞や内容についていくらかでも解ってくるにつれて、文や文節といった、言葉や内容の上のまとまりが、必ずしもメロディのまとまりごとにおさまっているわけではない、ということにも気がついた。

* * *

推論であるが、長い内容を歌い語る場合、その旋律は文や文節の区切りとは別の次元で組み立てられているのかもしれない。歌い語る人は音楽としてひとまとまりのメロディを繰り返し、そこへ物語の言葉をのせていく。そうする中で、意味の区切れ目と旋律の区切れ目が、一致するときもあればしないときもあるのかもしれない。

もっとも、筆者の感じたものが、アイヌ文化における歌い語りの音楽的な決まりごととして、本当にちょうどよい区切りやまとまりなのかどうか、ということとは別問題だ。筆者の音楽感覚の、大部分はいわゆる洋楽系統の音楽や訓練によって培われている。同世代の人の音楽背景と比べてもさほど特殊なケースではない。が、アイヌ語によるアイヌ音楽そのもので音楽感覚を培った人たちや、小さい頃からアイヌ音楽を見聞きする機会の多かった人たちの感じ方とは、たぶんかなり違うだろう。

* * *

そもそも歌い語りしてきた人たちはどう感じているのだろうか。伝承者に「区切りのいいところで止めてください」と注文したらどうなるだろう。

例えば、熊送りのときなどに演じる叙事詩などは最後まで語らない、とか、いいところでやめる、などともいわれているが、具体的にどの箇所でどう打ち切るのだろうか。何か決まり事があるのだろうか。

言葉のわかる人が言葉で物語を展開するのだから、やはり内容に沿って打ち切るのが自然か…とは思う。だが、同じメロディを何度も繰り返してきていながら、最後にそのメロディの途中で止まるのは、もっと感覚的なところでおさまりがよくなくはないのだろうか、とも思う。旋律という入れ物の形式が決まっているからこそ、言葉を即興的に自在にそこへ流しこんでいけるのかもしれない。音楽的におさまりがついたところでたまたま文が腰折れたせいで、いっそう内容の「続き」を期待させる効果がないとも限らない。

* * *

今のところは、いずれも推論である。確かめるためにも、より多くの録音資料を丹念に聴き、情報を集めて検証していかなければならない。

(甲地 利恵)



センター刊行物のお知らせ

- ・『久保寺逸彦文庫 図書資料目録』
- ・『バラートシ・バログ・ベネデクコレクション資料調査報告書』

・『ポン カンピソシ 4 チセ（住まい）』

アイヌ文化紹介小冊子の第4冊目です。住まいについて取り上げました。家屋のつくりや使われ方などについて、図や写真を交えて説明しています。

・『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第5号』

以下にテーマと執筆者を紹介します。

◇論 文 北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料（上） 沖野慎二

◇研究ノート アイヌ語のkotanと13世紀の中国史料にみえる豁瞳 中村和之

◇研究ノート ヤナギに関する一考察—アイヌの丸木舟に用いるヤナギの樹種の同定とその学名について 本田優子

◇調査報告 コロポクウンクル 澤井春美

◇調査報告 小川シゲノから上田トシへの伝承 3 大谷洋一

◇研究ノート 朗唱される祈りの旋律について～二谷一太郎氏の場合を例に～ 甲地利恵

◇資料紹介 音更（開進）尋常小学校関係資料 小川正人

◇論 文 アイヌ語静内方言の格助詞 奥田統己

◇資料紹介 『北海道土人陳述書』—アイヌ陳述に対する北海道庁弁明書（1895年）— 井上勝生

『研究紀要』『久保寺文庫図書目録』『バラートシ・バログコレクション報告書』は、道内外の大学、博物館、研究機関、図書館、アイヌ文化関係機関などに配布するほか、北海道行政情報センター（道庁別館3階）にて有償頒布する予定です。

平成10年度後半の主な動き

(10月)

- ・平成10年度第2回センター運営協議会

(11月)

- ・平成10年度史料管理学研修会（東京都／参加：小川）

(12月)

- ・平成10年度歴史民俗資料館等専門職員研修会（佐倉市／参加：大谷）

(1月)

- ・平成10年度第3回センター運営協議会

(2月)

- ・平成10年度JETプログラム北海道地区中間研修（札幌市／講師：澤井）

(3月)

- ・アイヌ文化講座（伊達市／伊達市教育委員会共催）
講演：小谷凱宣氏（名古屋大学大学院 教授）
- ・『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第5号』刊行
- ・『久保寺逸彦文庫図書資料目録』刊行
- ・『バラートシ・バログ・ベネデクコレクション資料調査報告書』刊行
- ・『ポン カンピソシ 4 チセ（住まい）』発行
- ・『アイヌ民族文化研究センターだより 第10号』発行

編集・発行 北海道立アイヌ民族文化研究センター

〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5F

Tel. 011-272-8801(代) Fax. 011-272-8850

開館/月～金9:00～17:00 休館/土・日・祝